復刻版

処女の友

全5巻・別冊1

戦前の農山漁村での青年女子社会教育の実態を明らかにする資料を復刻！

第Ⅰ期　1918（大正7）年11月～1922（大正11）年10月

◎発　行＝処女会中央部
◎体　裁＝A5判・上製・総3、054頁
◎定　価＝本体揃価格90、000円＋税
◎別　冊＝解題　渡邊洋子（京都大学大学院教育学研究科准教授）・総目次・索引
◎推　薦＝橋本紀子（女子栄養大学教授）
　　辻　智子（北海道大学大学院教育学研究院准教授）
◎原本提供＝財団法人日本青年館
　　静岡市庵原生涯学習交流館

●農漁村（出身）の女子の修養のために生まれた処女会。その処女会を束ねた処女会中央部の指導者・教育家たちは、都市が発達し、地方開発が叫ばれるなか、農漁村の生活の変容をどのように受け止めたのか。どのような国家観、社会観を持ち、どのような共同体を目指そうとしたのか。

●女性たちには、自らが置かれた環境でどのような学びがあったのか。封建的な家制度の下で、家事労働と生産労働に明け暮れ、「働かなければならなかった」彼女たちにとって、「働くこと」はいかなる意味があるのか。

近代日本社会教育史研究、女性史・ジェンダー史研究、女子労働問題研究、地方史研究など、20世紀を重層的に解き明かすための示唆に富む資料である。

不二出版

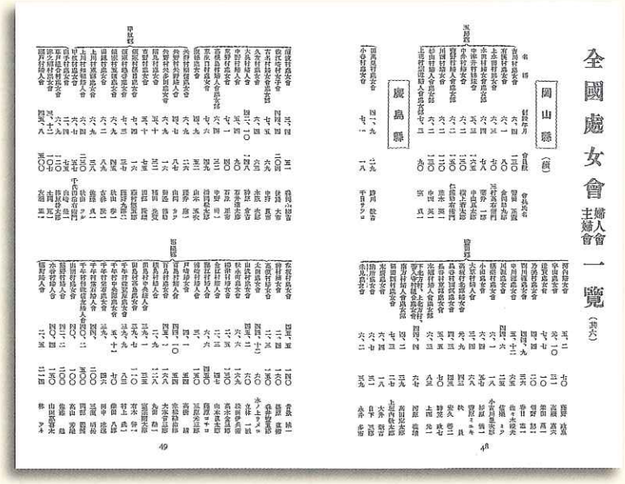
復刻版『処女の友』（処女会中央部　発行）

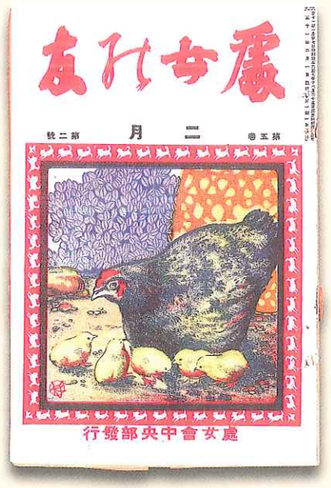
巻　数　全5巻・別冊1
体　裁　A5判・上製・総3、054頁
別　冊　解題・総目次・索引
　　＊別冊のみ分売可 定価＝本体1、000円＋税　ISBN 978-4-8350-7666-9
揃定価　本体90、000円＋税　ISBN 978-4-8350-7659-1
解　題　渡邊洋子（京都大学大学院教育学研究科准教授）
推　薦　橋本紀子（女子栄養大学教授）
　　辻　智子（北海道大学大学院教育学研究院准教授）
刊　行　2014年11月
原本提供　財団法人日本青年館、静岡市庵原生涯学習交流館

復刻版『処女の友』【第Ⅰ期】（1918年11月～1922年10月）収録内容

復刻版巻数	収録原本巻号	原本発行年月
第1巻	第1巻第1号、第2巻第1号～第2巻（第8号）	1918年11月～1919年10月
第2巻	第2巻（第9号）～第3巻第7号	1919年11月～1920年7月
第3巻	第3巻第8号～第4巻第4号	1920年8月～1921年4月
第4巻	第4巻第5号～第4巻第11号	1921年5月～1921年11月
第5巻	第4巻第12号～第5巻第10号 ＊第5巻第1号、第3号～第5号、第7号、第9号、第11号、第12号は未見	1921年12月～1922年10月
別冊1	解題（渡邊洋子）・総目次・索引	

＊〔　〕は編集部の補足であることを示す。
原本の収集状況により、1918年～1922年までに刊行されたものを【第1期】として刊行いたします。





不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160-2-94084

復刻にあたって

『処女の友』は、1918（大正7）年11月、処女会中央部によって創刊される。尋常小学校を卒業した後、生まれた場所の農山漁村で生活する女性たち、あるいは都市部の紡績工場などで働かなければならなかった女性たちに対しての教育、啓蒙を意図した雑誌である。発行母体である処女会中央部は、「処女会の父」と呼ばれ、内務省に嘱託勤務をしていた天野藤男の尽力により、地方で活動していた処女会（団体の名称は各地では「女子同窓会」、「娘の会」などと異なりさまざまであった）の「相互連絡を図り」、「擁護啓導」の機能を担うために同年4月設立された。地方婦女団体の設立、地方の処女会や紡績工場での巡廻講演、職業紹介などの身の上相談が主な事業内容であった。処女会中央部の発会式には、内務大臣後藤新平、文部大臣岡田良平や新渡戸稲造、留岡幸助等が出席する。当初理事には、棚橋絢子、跡見花蹊、三輪田真佐子、下田歌子、鳩山春子、山脇房子、嘉悦孝子、吉岡弥生といった女子教育家たちが迎えられた。地方青年女子の組織化は、簡略化して示すと、国家機関による教育政策に応じて以下のような推移で変遷する。1926年の内務省・文部省の共同訓令により、文部省主導で「青年女子ノ修養機関」として公共への活動を要請され、1927年には大日本連合女子青年団が創立されて、資金難で運営が厳しくなっていた処女会中央部は解体。『処女の友』は、大日本連合女子青年団の機関誌として引き継がれて、1941年1月に廃止されるまで刊行され続けた。その後『女子青年』に合併される。青年女子たちは大日本青少年団に統合されて「女子部」に位置付けられるに至り翼賛体制に組み込まれる。

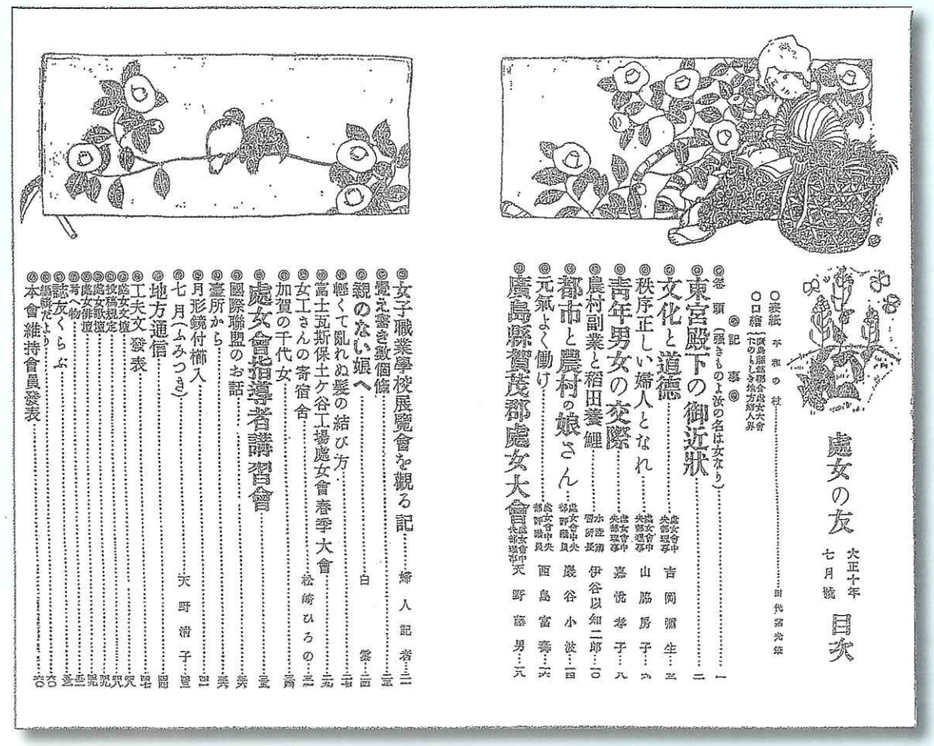
第一次世界大戦、ロシア革命、シベリア出兵など時代が大きく転換するなか、米騒動が起き、ストライキが頻発。そして女工問題など産業の近代化に伴い行き場所のないひとびとが社会に登場する。そのなかで地方の人間も社会的な変容を経験せざるを得なかった。静岡県庵原村出身の天野藤男は、その変容を受け止め、農漁村での男女の共同性、新たな身分秩序のあり方を模索し、青年男子の育成のために女子教育を位置づけて、実践する。

本誌で採りあげられた身の上相談には、編集の意図も反映されて限定的ではあるが、生活上での悩み、未来への不安が吐露され、当時農山漁村で、工場で、女性たちが背負った現実と生き方にたいする煩悶の切実さを読み取ることができる。農漁村で生まれた女性が都市に対して、自分自身が置かれた環境に対して、どのような意識を持っていたのかが誌面に充溢している。また、農漁村での生活に根差した些細なエピソードや、料理レシピの紹介記事など暮らしに基づいた記事が豊富である。

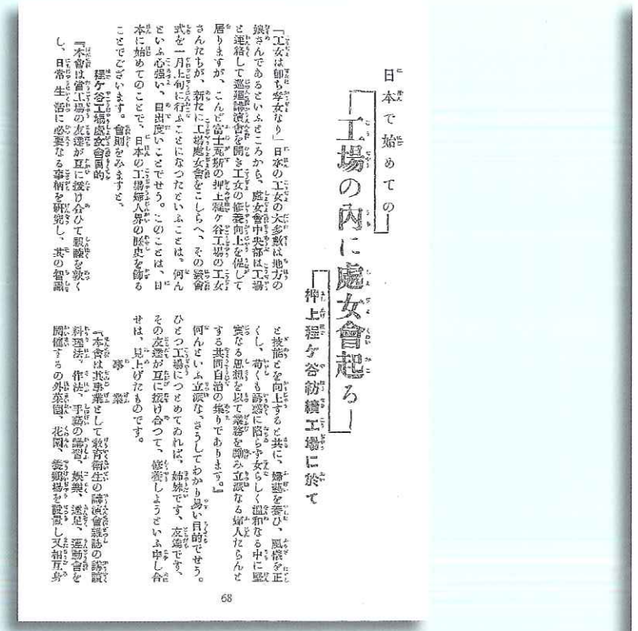
『処女の友』に集った女性たちの歩みを辿ることは、なによりもまず彼女たちの生動と、彼女たちが生きた現実的な位相を明らかにする。農漁村でのジェンダー、女性の労働や日常については、戦前からたびたびその問題の蔽いが問われて、女性の暮らしの実相に関心が向けられてきた。この度の復刻対象期間は1930年代、丸岡秀子が提起した「農村婦人問題」の前史として連なるものでもあるだろう。近現代社会教育史研究、近代女性史研究、地方史研究、ひろく近代日本史研究の資料として活かされれば幸いである。

——不二出版

▼第4巻第7号 7月号（1921年7月）

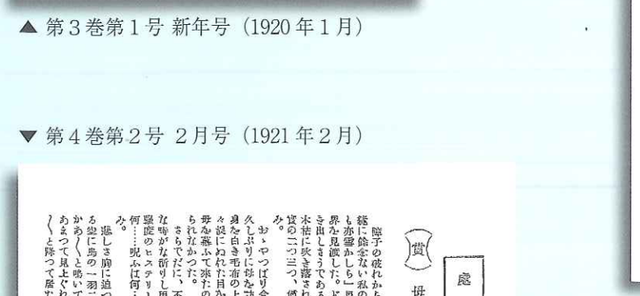


内容見本



▲第3巻第1号 新年号（1920年1月）

▼第4巻第2号 2月号（1921年2月）



▲第2巻第6号 8月号（1919年8月）

▼第3巻第11号 11月号（1920年11月）

農漁村の青年女子社会教育史から迫る 戦前・戦時下の日本人の意識の解明

●橋本紀子

『処女の友』は、尋常小学校卒業後の農漁村（出身）の青年女子のための教育・啓蒙雑誌で、初期の発行母体は、主に当時の著名な女子教育家たちで構成された「処女会中央部」である。最初の発行人は福島四郎で、当初は、都市の中産階層女性向けに発行されていた「婦女新聞」の姉妹版としても位置付けられた。彼女たちに期待されたのは、「良妻賢母」ではなく、「働妻健母」であり、分をわきまえて、農村で質素に働くことが説かれ、「余計なことを考えない人は仕合せ」とさえ強調された。

しかし、1927年に大日本連合女子青年団の機関誌となって以降は、より、鮮明に国家の求める女性像が鼓吹されて、「大陸の花嫁」「傷痍軍人の妻」になることも国策に協力することだと思わされていく。それらをも含む農漁村の「処女」たちの生の声が、大日本連合女子青年団の活動報告や読者の投稿からなる「誌友くらぶ」や懸賞作文等に見られる。

国民全体が戦争に巻き込まれていく仕組みを明らかにし、歴史の実像に迫るためにも、彼女らの息遣いを知ることのできる本誌は欠かせない資料である。さらに、本誌は、明治30年代頃まで広く各地に残っていた民衆の教育組織でもあり、婚姻ルートでもあった若者組と娘組の共同行動の慣行が、どのように当時の青年団活動に吸収されていったのか、奥むめを発行の『婦人運動』誌が対象とした、都市に出て、都市雑業層として働き、そこに疑似共同体を作ろうとした働く階層の人たちの意識とは、どこが違っていたのか等の解明に寄与する希少な資料としても注目される。

（女子栄養大学教授）

若い女性が政策対象にされる時代を読み解くために

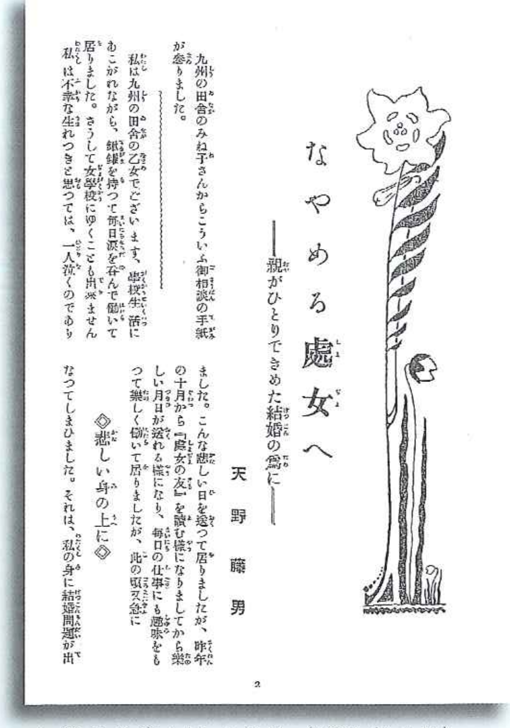
●辻　智子

戦前日本における地方農山漁村の若い女性に向けられる〝熱いまなざし〟が、どのような立場の誰によって、どのようにして生み出されていったのかを伝える歴史的資料である。このような本誌の存在は先行研究によって知られてはいたものの、このたびの復刻刊行によって網羅的にその実物を誰でも容易に見ることができるようになることはたいへん意義深い。

若い女性が置かれた状況や彼女たちに注がれるまなざしは社会を凝縮して映しだすが、そこに見られる要求や期待は、しばしば過剰で矛盾している。『処女の友』は、女性たちの都会への憧れを断ち、田舎の村で「強く、優しく、まじめに働け」と「働妻健母」への道を説いた。これは一方で女性の貧困を放置しながら、他方でその「活躍」を称揚せんとする昨今の日本の状況とも重なって妙なリアリティを感じさせる。中央と強く結びついた処女会組織が、戦時の国策遂行の担い手として「女子青年」の道を切り開いてゆくことにつながっていったことも私たちは忘れてはなるまい。雑誌自体は女性たちに対する上からの教え諭しを基調とし、教化・善導・修養・教訓に満ちたものである。とはいえ、遠慮がちに表出される個人の気配を敏感にすくい取りながら読みたいとも思う。

青年・青年期教育研究においても女性史・女性（女子）教育研究においても、また農山漁村・農林漁業の女性・ジェンダー研究においても、周縁的存在とされてきた彼女たちを基点に据えてみることは、私たちが世の中を見ぬく目を鍛える契機となろう。従属的な位置に置かれた者の視点から世の中を照射し、何が差別や抑圧に加担することになるのかを見きわめる局面を突きつけ、そして時に社会の前提や枠組み自体を俎上に乗せるパワーも感じさせてくれることだろう。この復刻刊行を機に、地方（田舎）の「女子青年」の視点を意識した研究の広がりを期待したい。

（北海道大学大学院教育学研究院准教授）



なやめる處女へ
――親がひとりできめた結婚の爲に――
天野藤男

九州の田舎のみね子さんからこういふ御相談の手紙が參りました。

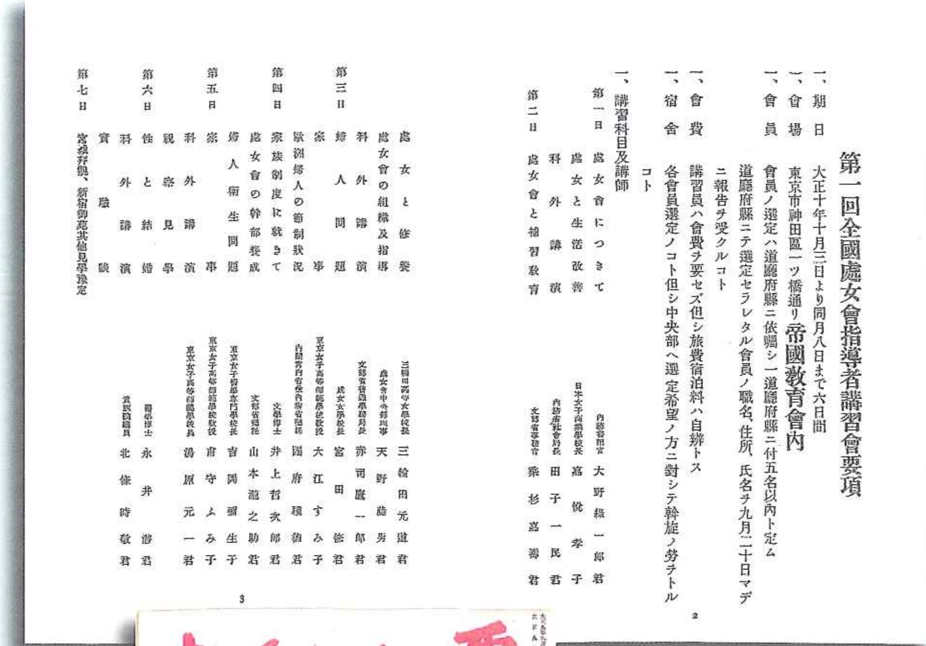
私は九州の田舎の乙女でございます、學校生活にあこがれながら、鎌鍬を持つて毎日涙を呑んで働いて居りました。さうして女學校にゆくことも出來ません私は不幸な生れつきと思つては、一人泣くのでありました。こんな悲しい日を送つて居りましたが、昨年の十月から『處女の友』を讀む樣になりましてから樂しい月日が送れる樣になり、毎日の仕事にも趣味をもつて樂しく働いて居りましたが、此の頃又急に

◎悲しい身の上に◎

なつてしまひました。それは、私の身に結婚問題が出

2

▲第3巻第4号 4月号（1920年4月）



第一回全國處女會指導者講習會要項

一、期日　大正十年十月三日より同月八日まで六日間
一、會場　東京市神田區一ツ橋通り帝國教育會内
一、會員　會員ノ選定ハ道廳府縣ニ依囑シ一道廳府縣ニ付五名以内ト定ム
道廳府縣ニテ選定セラレタル會員ノ職名、住所、氏名ヲ九月二十日マデニ報告ヲ受クルコト
一、會費　講習員ハ會費ヲ要セズ但シ旅費宿泊料ハ自辨トス
一、宿舍　各會員選定ノコト但シ中央部ヘ選定希望ノ方ニ對シテ斡旋ノ勞ヲトルコト
一、講習科目及講師
第一日　處女會につきて　内務書記官　大野綠一郎君
處女と生活改善　日本女子商業學校長　嘉悦孝子
科外講演　内務省社會局長　田子一民君
第二日　處女會と補習教育　文部省事務官　乘杉嘉壽君

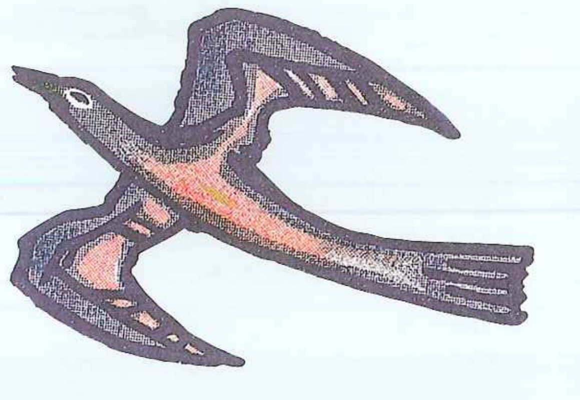
2

處女と修養　三輪田高等女學校長　三輪田元道君
處女會の組織及指導　處女會中央部幹事　天野藤男君
科外講演　文部省普通學務局長　赤司鷹一郎君
第三日　婦人問題　宮田脩君
家事　東京女子高等師範學校教授　大江すみ子
歐洲婦人の節制狀況　園府積伯君
第四日　家族制度に就きて　文學博士　井上哲次郎君
處女會の幹部養成　文部省囑託　山本瀧之助君
婦人衛生問題　東京女子醫學專門學校長　吉岡彌生子
第五日　家事　東京女子高等師範學校教授　甫守ふみ子
科外講演　東京女子高等師範學校長　湯原元一君
觀察見學
第六日　性と結婚　醫學博士　永井潜君
科外講演　貴族院議員　北條時敬君
實驗談
第七日　宮城拜觀、新宿御苑其他見學豫定

3

▲第3巻第9号 9月号（1920年9月）

▲第3巻第10号 10月号（1920年10月）



関連図書のご案内

山本瀧之助＝編（1911〜19年刊行）

良民

全9巻・別冊1

雑誌『良民』は、山本瀧之助が編集し、挿絵を竹久夢二が描き、河本亀之助が出版元となり、3人によって1911年2月に創刊された。「地方青年」であった3人は、「大正デモクラシー」生成期のうねりのなかで、「良民」を目指して、田舎での青年・壮年層の自己形成を支えた。広島県沼隈郡の山本家に残る唯一の原本をもとに、復刻した。教育史、とくに近代社会教育史の資料である。

●別　冊　解説（多仁照廣）・総目次
　＊別冊のみ分売可：本体1,000円＋税
●体　裁　A5判・上製・総4,356頁
●揃定価　本体150,000円＋税
●推　薦　大濱徹也・小川利夫・金原左門

中央報徳会・日本青年館ほか＝発行

『帝國青年』『青年』

【マイクロフィルム版】全48リール・別冊1

『帝國青年』（1916〜22年刊行）
『青年』（1923〜45年刊行）

1916年、中央報徳会は世に先駆けて青年団の指導の重要性を鑑みて、中央機関として青年部を設置、機関誌『帝國青年』を発行する。常務委員に岡田良平ら官僚が置かれ、新渡戸稲造、山崎延吉、留岡幸助、幸田露伴、松岡洋右が執筆している。戦時下での、青年たちの学習と生活のあり様を知ることができるのは本復刻の意義のひとつである。

●別　冊　解説（多仁照廣）・総目次・索引
　＊別冊のみ分売可：本体5,000円＋税
●マイクロフィルム版：35ミリポジティブ・ロールフィルム
　＊原本は菊判・並製・総約50,000頁
●揃定価　本体1,000,000円＋税
●推　薦　上野景三・小里貞利・菅原亮芳・渡邊洋子

関連図書〈復刻版〉のご案内

女子文壇社＝刊（1905～13年刊行）

女子文壇　全54巻・別冊1

●別冊＝解説（渡邊澄子）・総目次・索引
●菊判・上製・総24、210頁
●揃定価＝本体990、000円＋税

20世紀初頭、数多の逸材が集いその才能を磨きはぐくんだ本誌には、後に文壇あるいは社会活動に道を拓きその名を残す者の若き日の投書・習作を見ることができる。有名・無名を問わず、当時の女性が書くことによって何を求め何を感じていたかをうかがい知ることができる。

『女子文壇』執筆者名・記事名データベース

●監修・解説＝金子幸代
●体裁＝DVD1枚＋解説ブックレット
●定価＝本体20、000円＋税

DVDには、小社刊『女子文壇』解説・総目次・索引」では割愛した一般投稿者の表現内容や居住地などの詳細データをも収録。データ活用者の利便を考慮し、同内容のデータを、保存形式の異なる2種類のファイル（CSVとMicrosoft® Excel®）で提供。

叢書『青鞜』の女たち　全20巻（総21冊）

●函入・総7、720頁
●揃定価＝本体150、000円＋税

『青鞜』同人及び『青鞜』周辺の女たちの代表的著作20点を選び、復刻。それぞれに解説を付している。『青鞜』という存在の歴史的意義は繰り返し捉えかえされなければならない。

西川文子・木村駒子・宮崎光子＝主宰（1913～16年刊行）

新真婦人　全6巻・付録1・別冊1

●別冊＝解説（岡野幸江）・総目次・索引
●菊判・上製・総4、112頁
●揃定価＝本体120、000円＋税

新真婦人社の機関誌として創刊された。初期の女性社会主義者西川文子、木村駒子、宗教家宮崎光子らの主宰による、女性問題・女性解放を見据えた評論雑誌である。大正デモクラシーの息吹を伝える多彩な執筆陣を擁す。

ビアトリス社＝刊（1916～17年刊行）

ビアトリス　全1巻

●解説（岩田ななつ）・総目次・索引付き
●菊判・上製・総650頁
●定価＝本体18、000円＋税

『女子文壇』『青鞜』に連なる、女性に開放された文芸雑誌。平塚らいてう・岡本かの子・吉屋信子などが執筆。

改造社＝刊（1922～24年刊行）

女性改造〈戦前編〉　全12巻・別冊1

●別冊＝解説（尾形明子・鈴木裕子）・総目次・索引
●A5判・上製・総7、224頁
●揃定価＝本体240、000円＋税

1922年10月、『改造』の姉妹誌として創刊された本誌は、文学・評論・科学分野での豪華な執筆陣を擁した。1920年代のフェミニズムの旗手である女性たちが多数執筆している。

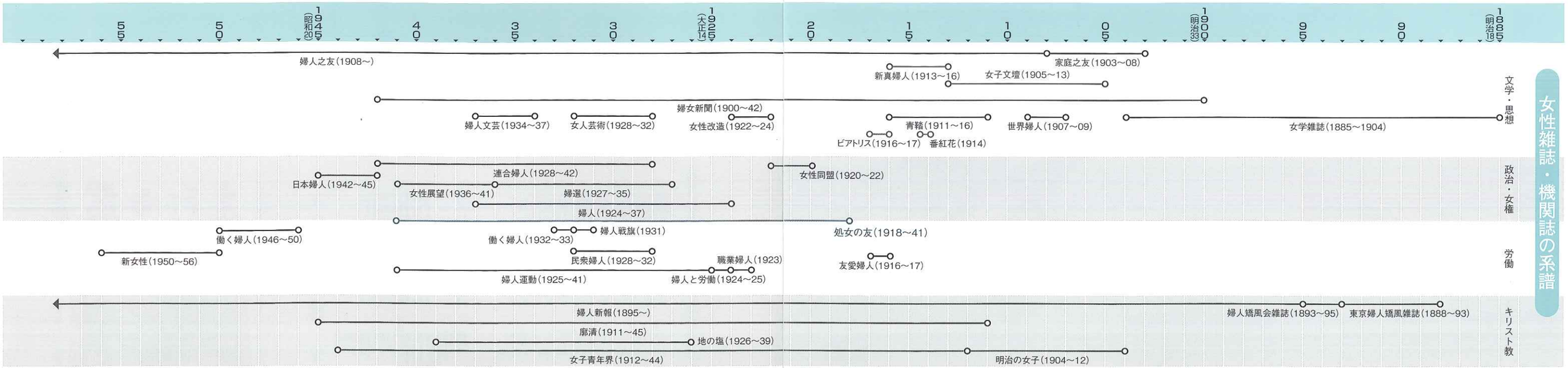
奥むめお＝主宰（1923～41年刊行）

婦人運動　全30巻・別冊1

●別冊＝解説（鈴木裕子）・総目次・索引
●A5判・B5判・上製・総9、938頁
●揃定価＝本体300、000円＋税

1923年、奥むめおが若い職業婦人たちとともにつくった職業婦人社の機関誌である。誌名は『職業婦人』、『婦人と労働』、そして『婦人運動』と変遷する。常に生活者であり労働者である女性の立場にたち、「婦人消費組合協会」、「婦人セツルメント」、「働く婦人の家」を設立するなど、女性の連帯を求めた運動の記録として今日の女性をめぐる問題への視座を探るための示唆を与えるものである。

女性雑誌・機関誌の系譜



全関西婦人連合会＝刊（1924～37年刊行）

婦人　全24巻・別冊1

●別冊＝解説（藤目ゆき）・総目次・索引
●B5判・上製・総9、860頁
●揃定価＝本体480、000円＋税

全関西婦人連合会は西日本全域の中産階級の女性を中心に300万人もの会員を擁した、職業婦人団体。基督教婦人矯風会のほか官製・半官製女性団体をも含めた連合体であり、戦前では世界でも最大規模の女性団体である。

東京基督教女子青年会＝刊（1926～39年刊行）

地の塩　全7巻・別冊1

●別冊＝解説（樽松かほる、影山礼子）・総目次・索引
●B4判・A5判・上製・総約2、800頁
●揃定価＝本体140、000円＋税

『地の塩』とは、新約聖書マタイによる福音書第5章13節「あなたがたは地の塩である」から採られている。1939年まで発行されて、その後は日本基督教女子青年会（日本YWCA）機関誌『女子青年界』に統合された。初代会長は津田梅子が務め、その後も指導力をもった女性たちが任についた。東京YWCAの下町でのセツルメント活動、世界YWCAとの交流を軸にした軍備縮小、世界平和の訴え、当時の東京の状況なども映し出す資料である。

婦選獲得同盟＝刊（1927～41年刊行）

婦選　全19巻・別冊1

●別冊＝解説（松尾尊兊・皃玉勝子）・総目次・索引
●A4判・A5判・B5判・上製・総7、572頁
●揃定価＝本体295、000円＋税

婦選運動の中核となって参政権・公民権・結社権の獲得を目指した婦選獲得同盟の機関誌として創刊された。婦選運動は各層の女性を結集し1930年には第1回全国婦選大会開催にいたるが、ファッショ時代の到来とともに母子保護法制定・選挙粛正等の活動に比重を移し次第に体制側に組み込まれてゆく。1936年、『女性展望』と改題する。

神近市子＝主宰（1934～37年刊行）

婦人文芸　全10巻・別冊1

●別冊＝解説（黒澤亜里子）・総目次・索引
●菊判・上製・函入・総6、362頁
●揃定価＝本体150、000円＋税

女性文芸雑誌『女人芸術』『火の鳥』が相次いで終刊になった昭和初期、女性が表現する場として求められたのが本誌である。

東京連合婦人会＝刊（1928～42年刊行）

連合婦人　全9巻・付録1・別冊1

●別冊＝解説（後藤明日香）・総目次・索引
●A4判・B5判・総3、842頁
●揃定価＝本体200、000円＋税

関東大震災をきっかけとして誕生した東京連合婦人会の機関誌である。吉岡彌生ら、女子教育者や活動家が健筆をふるう。震災後の救済活動をおこなうために多くの女性団体が集い、会は各団体を繋ぎ束ねる、連絡機関としての役割を果たした。1931年に文部省主導で大日本連合婦人会が組織され東京連合婦人会も加盟、1942年には大日本婦人会に統合される。

大日本婦人会＝刊（1942～45年刊行）

日本婦人　全5巻・別冊1

●別冊＝解説（小山静子）・総目次・索引
●B5判・A5判・上製・総1、686頁
●揃定価＝本体80、000円＋税

1942年1月に結成された官製団体大日本婦人会は、会員数2000万人を誇る最大の女性組織であった。女たちは銃後をどのように担ったのか。総力戦下の女性動員を明らかにする貴重な雑誌のひとつである。

新女性社＝刊（1950～56年刊行）

新女性　全16巻・別冊1（DVD付）

●別冊＝解題（伊藤康子）・総目次・索引＋DVD－ROM
●A5判・上製・総9、496頁
●揃定価＝本体370、000円＋税

敗戦後、『働く婦人』などいくつもの女性雑誌が誕生するなか、啓発的な立場からでなく編集部と読者との緊密な提携によって運動の歴史に新たな一ページが刻まれた―現実を直視した名もなき女性たちによる闘争と活動の記録！